



Title	懷徳堂の孔子祭
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懷徳堂研究. 2023, 14, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94539
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂の孔子祭

湯 浅 邦 弘

序 言

大正十一年（二〇二二）は、儒教の聖人孔子が亡くなつてから二千四百年に当たり、日本でも、湯島聖堂、二松学舎、足利学校、懷徳堂、多久聖廟など全国の漢学系教育機関において孔子祭（せきまつ）が挙行された。

大阪の懷徳堂では、同年十月八日午前十一時から恒例の懷徳堂先師儒の祭典が行われ、引き続き午後一時から孔子祭典が行われている。

ただ、江戸時代の懷徳堂も、大正時代に再建された懷徳堂も、本来は「孔子を祭る」学校ではなかった。そのため、これまでの懷徳堂研究で、この孔子祭を取り上げで考察したものはない。

では、懷徳堂の歴史においてこの孔子祭はどのような

意味を持っていたのであろうか。また、明治維新以降、新たな学問体系を構築しつつあった近代日本において、儒教や孔子はどのようにとらえられていたのであろうか。

本稿では、この大正時代の孔子祭の実態を可能な限り明らかにし、懷徳堂および日本近代史における孔子祭の意義について考察してみたい。

一、懷徳堂と孔子

まず、江戸時代の懷徳堂と孔子との関わりを確認してみよう。懷徳堂は享保九年（一七二四）、大坂の有力町人「ごうし五同志」が三宅石庵を迎えて開設した民間の漢学塾である。二年後の享保十一年（一七二六）、中井^{なかい}^{いしゅう}^{あん}菴の尽力により官許学問所となるが、大阪町人による事実上

の運営はその後も継続された。そのため「半官半民」は懷徳堂最大の特色ともなっている。町人の築いた富の上に学術文化が花開くというのは、近世大阪の大きな特徴であろう。^①

ただ、町人が運営したからといって、その学術的レベルが低かったという訳ではない。当時、民間の初等教育機関として寺子屋が庶民の識字率向上に貢献したと言われる。これに対して懷徳堂は、単なる読み書き算盤の塾ではなく、中国伝来の儒学（朱子学）を基本とし、漢籍の講読を通して人格形成を目指す学問所であった。

初代学主の三宅石庵は懷徳堂官許の記念講演として、『論語』『孟子』の各首章を取り上げて講義した。その講義を受講生が筆記した記録が『論孟首章講義』として残されている。懷徳堂創立に際して真っ先に取り上げられたのは『論語』『孟子』という儒教經典であった。懷徳堂と孔子との関係は創立当初から經典を通じてあったと言える。

第四代学主中井竹山（一七三〇～一八〇四）の頃に全盛期を迎え、竹山は懷徳堂を江戸の昌平坂学問所と並ぶ官立学校にしたいと考えた。それほど高度で充実した教育学が展開されていたのである。当時の老中首座松平定信の諮問を受け、その答申として経世策『草茅危言』を呈

上したことも大きな自信になったことであろう。

寛政四年（一七九二）に市中の火災で類焼した際の再建計画では、敷地を二倍に拡大し、「孔子廟」を設けることが検討されていた。そもそも懷徳堂の敷地と学舎は五同志が提供したもので、あくまで普通の町人屋敷であったが、そこにさまざまな教育的工夫を凝らし、儒教空間とする努力が続けられていた。^②

寛政大火後の再建に際して、竹山はそれまでの懷徳堂になかった「孔子廟」を設けようとした。図面によると、学舎に入って左手に、池に囲まれた「拝殿」があり、渡り廊下でつながったその奥に「聖廟」と記されている。この入口には「門」があり、一番奥には「聖像」、その横には「四配」の文字も見える。つまり、孔子廟の中に孔子の像と四配の像を設置しようとしていたのである。

この計画は、結局予算の都合で実現しなかったが、もし孔子廟が併設されていたら懷徳堂の性格はその後やや変容した可能性もあろう。

また竹山は別途、京都の公家からの依頼で御所内の学校計画も立案した。その計画図面には、「観光院」と記されている。竹山はこれにより、昌平坂学問所、懷徳堂、観光院という三都の官立学校並立を目指したのである。^③

その設計図面と構想を解説した「建学私議」によると、

中央に大きな「講堂」を置いて「明新堂」と名づけ、尊貴の方が休息する一間は「就将閣」とし、次の一間は平日に会集する場所として「時習軒」とし、教授の間は「尊賢斎」、次の一間は食事茶所として「授祭堂」、中門は「進修門」とするなど、中国古典に由来する名称を付けるべきだと提言する。

参考までに記すと、校名の「觀光院」は『易経』に由来し、以下順に、出典となるのは、「明新」が『易経』、「就将」が『書経』、「時習」が『論語』、「尊賢」は『中庸』、『孟子』、「授祭」は『詩経』、「進修」は『易経』である。さらに注目されるのは、敷地の奥に大きな「聖堂」（孔子廟）の基壇が描かれていることである。「建学私議」によると、まずはこの敷地を確保しておいて、後に聖堂を建設する。その際、孔子とともに祀る配享（はいきやう）についても「十哲」などの俗習は廃絶し、日本独自の配享を検討すべきだと具体的な提言をしている。

この計画も、京都の大火などで実現しなかったが、竹山が官立学校内に孔子廟を併設したいと考えていたことは明らかである。

結局、幕末まで懷徳堂に孔子廟が設置されることはなく、孔子を祭る儀式すなわち釈奠が挙行されたとの記録もない。懷徳堂はあくまで漢籍を通じて儒教精神を学ぶ

学校だったのである。

ただ、「祀る」という文化がなかった訳ではない。懷徳堂には「祠堂」があった。懷徳堂第二代学主の中井甕庵は『喪祭私説』を執筆し、朱子が定めた『家礼』の内、特に「葬」祭二礼について解説した。『家礼』は中国士大夫の冠婚葬祭の礼を規定したものである。甕庵は、この『家礼』の精神を尊重しながらも、日本の住宅事情や貧富の差などを考慮して、柔軟に受容しようとした。懷徳堂においても「祀る」ことは重視されていたが、その対象は孔子ではなく、懷徳堂の先人たちであった。中井竹山が描いた寛政年間の再建計画図面でも、「聖廟」の隣に別棟で「祠堂」とあり、その奥に「四龕」と記されている。これは、神位を収める厨子のことで、四代前までの神位を安置するためのものである。

二、重建懷徳堂と孔子祭

では、大正時代に再建された懷徳堂ではどうだったのだろうか。明治二年（一九六九）に閉校した懷徳堂を惜しむ声が明治時代の中頃からおり、懷徳堂の顕彰運動が活発化してくる。

江戸時代の懷徳堂教授の子孫中井木菟麻呂は、明治二

十六年（一八九三）に「重建懷德堂意見」を発表し再建を目指したが実現しなかった。

明治時代の終わり頃に懷德堂顕彰を大きな運動とすることに成功したのは西村天囚である。明治四十三年（一九一〇）に懷德堂記念会が発足し、大正二年に財団法人として認可され、大正五年（一九一六）、懷德堂が再建される（重建懷德堂）。

この重建懷德堂は、江戸時代以来の漢学を基本としながらも、自然科学、社会科学の講義も実施し、日本近代の学校として大阪市民に開放された。

その基幹事業の一つとして、懷德堂では毎年十月に恒祭こゑまつりが行われていた。歴代教授など物故功労者を儒式により追悼する祭典である。それが十月に行われていたのは、江戸時代の懷德堂の開学が十月だったのになむ。重建懷德堂ではこの恒祭のほか、講義、講演、出版などの文化事業が活発に行われていた。孔子との関係は、あくまで儒教經典の講読を通じてのものであった。

ところが、大正十一年（一九二二）は、孔子没後二十四百年記念事業として孔子祭を挙行している。

それでは、懷德堂の歴史において孔子祭はどのように位置づけられるのであろうか。また通例の恒祭との関係はどのように考えられていたのであろうか。残念なが

ら、懷德堂記念会には、その詳細な記録が残っていない。懷德堂の事業については機関誌『懷德』に彙報として毎年掲載されるが、『懷德』が創刊されるのは大正十三年（一九二四）で、この時期の活動については不明の点が多いのである。

そこでまずは、当時の新聞報道を確認してみよう。大正十一年十月七日付大阪朝日新聞朝刊は、翌八日に懷德堂で「孔子二千四百年祭典」が挙行されるとの予告記事を掲載し、同九日付朝刊は、「懷德堂の孔子祭」の見出しで、三十行を超える長文によって、その概要を写真入りで紹介している。

これによると、十月八日午前十一時から大講堂において懷德堂先師儒の祭典（恒祭）が行われ、続いて会務報告と表彰修業証書の授与。昼休憩の後、午後一時から孔子祭が執行された。祭主は松山直藏教授まつやまなおざう、諸役は聴講生が務め、講堂奥の祭壇には孔子の神位を安置した。奏楽の中、幣・饌へい・せん、醴れいを献じ、松山教授が祝文を奉読した。その祝文冒頭は次の通りである（十月九日付大阪朝日新聞による。漢字は現行字体に改める）。

大正十一年、歲次壬戌、自先聖夫子歿、周甲四十、
歷年二千四百、懷德堂記念会於十月八日、設位於堂

上恭修釈菜之礼、教授松山直蔵為祭酒、敢昭告于夫子曰、……。

干支の「壬戌（みずのえいぬ）」は大正十一年（一九二二）、「周甲四十」とは、干支の先頭の「甲子」が四十周したとの意味。干支は六十年で一周するのでその四十倍で「二千四百」年となるのである。

またこの祭典は古記録に従い、迎神、献幣、献饌、献醴、奉進祝文、飲福受胙、徹饌、送神の順序で行った。この古記録とは唐の開元年間に始まり我が国に伝わって行われていた釈奠（釈菜）のことである。

小休憩の後、二時半から松山直蔵「論語里仁篇富貴章」の講義、京都大学の狩野直喜「孔子伝の一節に就きて」の記念講演があり、午後四時半に散会した。

報道によると、この祭典には、中井木菟麻呂など懷徳堂関係者のほか、京都大学荒木寅三郎総長と博士九名、および東京から西村天四も参列した。また、大阪、京都、兵庫、奈良各県から中等学校校長および国漢担当教員二百余名が参列し「頗る盛況」であったという。

新聞報道から知られる概要はこの程度である。他の資料も交えて今少し詳細を追ってみることにしよう。

三、孔子祭の実態

まず報道にある古記録すなわち釈奠について確認したい。「迎神」から「送神」までの内訳については、具体的な内容が報道されておらず、また懷徳堂記念会にもその記録が残されていない。

そこで、釈奠の実態を詳細に伝えている足利学校の記録に依拠しながら推測してみたい。日本最古の学校とされる栃木県の足利学校では、室町時代の関東管領上杉憲実が復興した頃にはすでに釈奠が実施されており、その後も毎年挙行され、その詳細な記録も残されている。もっとも、時代によって変化はあったようであり、また足利学校特有の事情として、創始者とされる小野篁の祭祀との関係もあったが、基本的には古式が継承されているという。史跡足利学校研究員の市橋一郎氏が「足利学校の釈奠」（史跡足利学校研究紀要『学校』第二十号、二〇二二年）として、釈奠の原義、中国・日本における釈奠の歴史を詳細にまとめていて大変参考になる。

それによれば、本来「釈奠」は獣屍を裂いた犠牲と酒を供えなければならないが、これができるのは天子・諸侯に限られていたので、孔子の弟子門人たちも厳密に言

えば、「積奠」を実行することはできず、その簡略版として、蔬菜を供える「せきえい積業」が行われていたとする。そして足利学校でも、例えば寛政四年（一七六二）略積業式の流れは次のように記録されているという。

参加者参列、迎神、供献、祝文朗読、賜胙飲福、撤供、送神、礼畢。

「迎神」は聖廟の神位に神をお迎えすること、「供献」は供え物を捧げること、「祝文朗読」は祭主が祝文を奉ること、「賜胙飲福」は供え物を祭主および参列者がいただくこと、「撤供」は供物を撤収し、これにより「礼畢」、すなわち儀礼が終了となるのである。この流れは、大正十一年の懷徳堂の孔子祭でも基本的にはほぼ同じであったと言えよう。

しかし、足利学校では、こうした積業挙行に必要なものとして、神位や像、祭礼の器物などが記録されている。供物を盛るための様々な祭器は必須のものであろう。また、積奠・積業は、孔子のみならず「四配」すなわち顔回、曾子、子思子、孟子などをもあわせて祀っていた。そのため、孔子および四配の神位や像は神をお迎えするために不可欠なものであった。

それでは、孔子を祀る学校として設立された訳ではない懷徳堂において、こうした設備はあったのであろうか。重建懷徳堂は、大阪府から無償提供された三百六十一坪の敷地に建てられた。通りに面した正門を入ると左手に二階建ての事務所棟がある。それを左に見ながら進むと車寄せがあり木造校舎の玄関となる。重厚な屋根瓦が葺かれていた。これを入ると、中央廊下の両側に小講堂が一つずつ、その廊下の突き当たりに大講堂があった。



写真1 重建懷徳堂大講堂内部

江戸時代の懷徳堂のような畳の間ではなく、床ゆかに椅子・テーブルが置かれていた。その奥の一段高いところに「講壇（教壇）」があった。この様子は写真1からもよく分かる。懷徳堂はあくまで教学の場であり、祭祀を前提に建設された訳ではないので



写真2 孔子祭の様子

ある。大正十一年の孔子祭の様子を伝える写真2では、この大講堂の机・椅子が取り払われて、分かれる。懷徳堂に孔子祭祀の場が常設されていたとは言えないであろう。

また経費面について、懷徳堂記念会の財団資料を手がかりに推測してみよう。明治四十三年に創設された懷徳堂記念会は、大正二年に財団法人として認可された。財団法人は、現在でもその事業実態を厳しく監査される。そのため当時も、領収書一枚に至るまで保存していたようである。残念ながら、すべての年度について資料が残っている訳ではないが、ちょうどこの孔子祭のあった年については、「証憑書類」として膨大な資料が束になって残されている。それによれば、大正十一年十月の孔子祭関連経費とし

て支出されたのは、おおむね次のような費目であった。

- ・講演を務めた京都大学教授狩野直喜への謝礼「五十圓」
- ・祭典用人足賃延べ十二人分「参拾圓」
- ・式次第等印刷費「参圓六拾錢」
- ・奏楽謝礼「参拾参圓五拾錢」
- ・写真代「貳拾圓」
- ・記念菓子二百「貳百六拾六圓貳拾錢」
- ・折詰弁当百二十「六拾四圓」
- ・孔子祭講演広告料「拾四圓四拾錢」など。

また、この翌年の大正十二年（一九二三）十二月に、懷徳堂講師武内義雄校訂の『論語義疏』が懷徳堂記念会から刊行されているが、これも孔子没後二千四百年記念事業の一環であった。その経費は前年の十一月、すなわち孔子祭の翌月に、『論語義疏』印刷費前渡金として京都の弘文堂書房に六百円の小切手が振り出されている。興味深いのは、同社より「活字設備費代金」として、その領収書が届いていることである。

当時は活版印刷だったため、一字ずつ活字を組んで版下を作る必要があった。特に古い漢字の字体は通常の印刷

物では使用しないため、こうした特殊な印刷物については、その活字を揃えるところから始めなければならなかったのである。弘文堂の領収書に「活字設備費代金」と記されているのはそのためである。

参考までに記すと、同年十月の人件費は計「七百拾七圓拾錢」。内訳は松山直蔵教授二百圓、武内義雄講師百圓、吉田銳雄^{よしだはやお}書記八十圓などとなっている。また光熱費として、ガス代金三十三錢、水道料四圓六十六錢、電話料十三圓九十三錢、電灯料三十三圓八十三錢などを支出している。

このように財団資料を精査してみても、孔子に直接関わる経費は支出していないのである。つまり、新たに孔子の像を作ったり、記念碑を建てたり、祭器を揃えたりという形跡はない。最も経費がかかったのは、記念菓子代金だったというのがそれを象徴している。

ただ、当日撮影された記念祭の写真3では、講堂奥を祭壇として、そこに孔子の神位が安置されているように見える。ぎりぎり拡大してみると「先聖孔子神位」の文字が読み取れる。この神位はどうしたのであろう。

この謎を解く鍵が、西村天囚の郷里種子島に残されていた。天囚の手帳（日記）十九冊が西村家に保管されており、その大正十一年の記載によって、この前後の懷

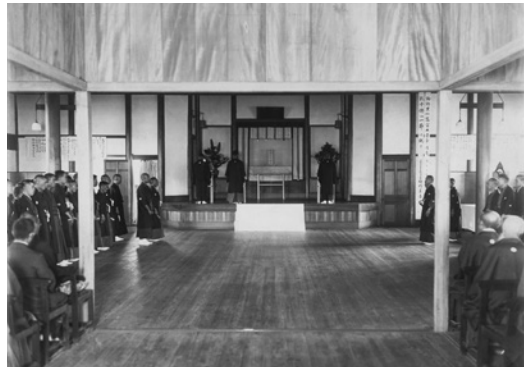


写真3 孔子祭（祭壇に先聖孔子神位）

徳堂と天囚の動向が知られるのである。

それによると、当時東京朝日新聞の主筆として東京在住だった西村天囚は、この孔子祭のために一時大阪に戻った。十月四日、午前九時半発の汽車に乗り、同日夜八時半に大阪着。翌日は大阪の

自宅、翌六日は、朝日関係者と会合した後、懷徳堂の茶話会に臨んでいる。そして祭典前日の十月七日（土）のページには、「書先聖孔子神位」と墨書されている。

つまり、この神位は懷徳堂記念会の依頼により、天囚が自ら墨筆で記したものだのである。逆に言えば、それまで重建懷徳堂には、祭典に使えるような孔子の神位はなかったということになる。

また、祭典当日の十月八日（日）は、「霽。午前懷徳

師儒祭典、午後孔子祭畢有講演、晚赴大阪ホテル之宴」と記載されている。前日までの雨が上がつて晴れ、午前中は師儒祭典すなわち恒祭が举行され、午後から孔子祭、その後、講演という流れである。さらに夜は大阪ホテルで記念の宴会があったことも分かる。午前中が通常の恒祭で、午後から孔子祭となっているのは、新聞報道とも合致する。

ついでにこの日記に基づき、同年十月二十九日に湯島聖堂で举行された孔子祭と西村天因との関係についても言及しておこう。

十月二十九日（日）の項には、「晴。至湯島聖堂参列孔子祭」と記されている。つまり天因は、八日の懷徳堂での孔子祭に続き、二十九日の湯島聖堂の孔子祭にも参列しているのである。手帳の記載によると、天因はその後、上野の日本美術協会の先儒墨迹展覧を参観し、夜は帝国ホテルで開催された記念宴会に臨んでいる。

また、湯島聖堂の孔子祭では、祭主を徳川宗家第十六代当主で斯文会会長の徳川家達公爵が務め、祭文を奉読したが、実は、この祭文起草したのが他ならぬ天因だったのである。その文章は以下のような書き出しとなっている。

維大正十一年、歲在玄默闍茂、自至聖孔子卒二千四百年于茲、斯文會於十月二十九日、謹致祭於聖廟神座之前、會長公爵徳川家達敢昭告于孔子之靈曰、……。（『碩園先生文集』卷三）

この内、「玄默」は十干の壬の異名、「闍茂」は十二支の戌の異名で、「壬戌」は、先の懷徳堂の祭文にもあった通り、大正十一年である。天因は、同月十九日に、「斯文会委員会」に出席したと手帳に記しているので、湯島聖堂の孔子祭には委員として加わり、祭文の起草についても依頼を受けたと推測される。手帳の九月末尾の空欄に、天因は、「文債」として「斯文会孔子祭文」など五件の名を記している。漢文執筆を依頼されることの多かった天因はいくつもの草稿を抱えていた。湯島聖堂孔子祭の祭文も締め切りに追われて執筆していた様子がかかる。

このように、西村天因が大正十一年の孔子祭に深く関わっていたことが明らかになったのであるが、一方で、懷徳堂自体は、孔子に直接関わる経費を支出した訳ではないのである。

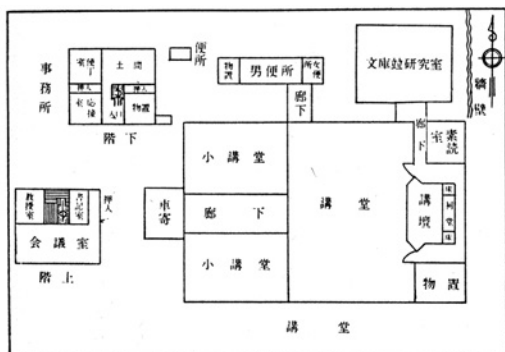
その後は懷徳堂において孔子祭は行われず、毎年秋の恒祭や記念事業の際には、従来通り、懷徳堂先師儒・功

労者の神位を安置して、祭文を奉読している。懷徳堂の奉祀規定第一条にも、「懷徳堂記念会は本会の事業並に経営維持に功労ありたる物故者を奉祀し毎年一回恒祭を行う」「毎年恒祭執行後碩学^{せきがく}を聘して記念講演を行う」と明記されている通りである。このことは重建懷徳堂の平面図でも確認できる。大講堂の奥に「講壇」があり、その奥には「祠堂」と記されている。

写真4は、懷徳堂教授の子孫中井木菟麻呂が家蔵の貴重資料を昭和十四年（一九三九）に懷徳堂記念会に寄贈する際、懷徳堂先師儒・功労者の神位を前に祭文を奉読している様子である。その「祠堂」の扉が開かれ、大きな神位が置かれている。一つは懷徳堂先師儒、もう一つは功労者である。大正十一年の孔子祭で安置されていた孔子の神位がここには見えない。

四、その後の孔子祭

このように懷徳堂の孔子祭とは、孔子没後二千四百年



重建懷徳堂平面図



写真4 祭文を読む中井木菟麻呂

記念事業としての特例であった。逆に言えば、ここにこそ、湯島聖堂や足利学校などとは異なる懷徳堂の特色が認められる。江戸時代以来の商業都市大阪では、商業活動・市民生活の基盤としての倫理道德が強く意識され、人格形成に資するものとして儒教經典の学習が求められた。その重要な機関として設立されたのが、懷徳堂だったのである。しかもそれは、江戸幕府や明治政府によって提供されたものではなく、大阪町人・市民が自ら創設

し維持していたのである。

では、本家の中国において、孔子祭（釈奠）は当時どのように継承されていたのであろうか。

大正十一年は西暦一九二二年、中華民国十一年にあたる。孔子祭が日本で挙行された同年十月頃の新聞報道を参考に見よう。十月十八日付朝日新聞は、中国の新聞各紙を引用する形で、当時の中国における孔子の評価を記している。

まず、中華新報に、「孔子は支那の生んだ最大の人格者の一人」「東洋文明建設の最大貢献者」と、依然として孔子が高く評価されていることを紹介する。ただ、当時の高名な思想家章炳麟（号は太炎）の言葉として、「孔子崇拜は……閔帝岳飛に及ばない」「孔教は宗教ではなくして支那固有の宗教は寧ろ道教」という論評を紹介する。つまり、当時の中国人にとって、崇拜の対象は、儒教の孔子よりも道教の神々であったという。

一方、儒教と孔子に対する厳しい評価があることも知られる。時事新報には、「孔子崇拜の徒は日に減少」「支那青年の孔子反対は孔子を偶像的に崇拜するに對する反感より来るのである」とある。ただ基本的には、この新聞でも、「現代の思想には完全には適用できないが孔子は支那民族中の大思想家」として一定の評価を下している。

ところが、民国日報では、「孔子の政治論は殆ど破産的」「一切の進歩的思想を妨げ」「孔子祭を廢し孔子の廟は學校とし」と孔子崇拜を前近代的なものとして排斥しようとしている。

さらに六年後の一九二八年、すなわち中華民国十七年になると、報道は一層厳しさを増してくる。濟南特派員の記事として、「浮かばれぬ孔子」「反聖人熱みなぎり」「いよいよ本年限りの孔子祭」という見出しで、孔子の出身地曲阜でも、猛烈な廢孔子祭運動が起り、南京（金陵）の大学院から「孔子祭廢止令」が出される中、濟南城内の孔子祭が唯一の開催でこれが最後になると報じている。三民主義に抵触するとして、国民政府の存続する限り「その復活は覺束ない」と結んでいる。

その翌年（一九二九）の『懷徳』第七号に掲載された竹内峰治「支那の祀廟」は、中国各地をめぐった紀行であるが、その中で、南京では「孔子廟、貢院等」は、「国民政府首都の建設に没頭して寺院、祀廟の殆ど夫等政府の賑房に当てられ」ていたと説く。また、北京の孔子廟については、「四辺の雑草は生えたるに委して手の行きとどかざる荒廢のさま」と紹介している。

その後も孔子は歴史に翻弄される。一九六〇年代から七〇年代にかけてのいわゆる文化大革命において、孔子

は「批林批孔」のスローガンのもと、中国共産党副主席林彪（りんびょう、一九〇八―一九七二）とともに、反革命の象徴として痛烈に批判された。

しかし一転して現代では、曲阜の孔子廟・孔府・孔林が世界遺産に登録され、儒教の力を借りて民衆の道徳性を高めようとする政治運動が展開されるなど、孔子は常に中国の歴史と文化に深く関わってきているのである。

結 語

懷徳堂はもともと孔子を祀る学校として建てられたものではない。大阪町人の学問所として大阪町人が自ら創設したのである。

ただ儒教を基本とする漢学塾だったという点で孔子との接点は一貫してあったと言える。そして一時は、中井竹山によって孔子廟の併設も検討された。

また、教学の成果は多くの文献として残された。それが現在、大阪大学懷徳堂文庫五万点の資料となって継承されている。

明治から大正にかけて懷徳堂の再建運動が起った際、大きな役割を果たしたのは西村天囚である。種子島出身の天囚は、東京大学に新設された古典講習科で漢文を学

んだ後、大阪に移り、当時の大阪朝日新聞に入って活躍した。現在も続いているコラム「天声人語」は天囚の命名による。

天囚が大正十一年の孔子祭に深く関わっていたことについてはすでに述べた通りである。ただ、これまであまり注目されていなかったのが、明治四十三年（一九一〇）の世界一周旅行である。天囚を含む五十七名の民間人が百四日間かけて欧米諸国を巡った。そこで新しい近代の学問、および学校や図書館の重要性、先人顕彰の様子などを学んで帰る。この体験も懷徳堂再建を強く後押ししたのではないかと推測される^⑦。

重建懷徳堂は昭和二十年三月の大阪大空襲で焼失してしまう。しかし懷徳堂の資料と精神は現在も継承されている。蔵書は大阪大学懷徳堂文庫となり、恒祭は、先師を追悼する「懷徳忌」に形を変えて毎年春に挙行されている。姿形は変わっても、懷徳堂の伝統と精神は今も息づいていると言える。

令和四年（二〇二二）は大正十一年の孔子祭が挙行されてから百年後、すなわち孔子没後二千五百年であった。また令和六年（二〇二四）は、江戸時代の懷徳堂が創設されてから三百年にあたる。

【写真・画像出典】

本稿に掲載した重建懷徳堂関係の写真・画像についてはすべて一般財団法人懷徳堂記念会より掲載の許可を得たものである。

参考文献

- ・湯浅邦弘「懷徳堂の祭祀空間——中国古礼の受容と展開——」(『懷徳堂研究』、汲古書院、二〇〇七年)
- ・湯浅邦弘編著『増補改訂版懷徳堂事典』(大阪大学出版懷徳堂、二〇一〇年)
- ・陶徳民「懷徳堂朱子学の研究」(大阪大学出版会、一九九四年)
- ・竹田健二「市民大学の誕生——大坂学問所懷徳堂の再興——」(大阪大学出版会、二〇一〇年)
- ・湯浅邦弘「世界は縮まれり——西村天囚『欧米遊覧記』を読む」(KADOKAWA、二〇一二年)

注

- (1) 以下、懷徳堂の基礎的な情報については、湯浅邦弘編著『増補改訂版懷徳堂事典』参照。
- (2) この点の詳細については、拙稿「懷徳堂の祭祀空間——中国古礼の受容と展開——」参照。
- (3) この図面については、拙著『懷徳堂の至宝——大阪の「美」と

「学問」をたどる——(大阪大学出版会、二〇一六年) 参照。

- (4) 「十哲」とは、孔子門人の中で特にすぐれた十人をいう。『論語』先進篇にその名が見え、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓・宰我・子貢・冉有・季路・子游・子夏。また、これら十人が、德行・言語・政事・文学に分類されていることから、「四科十哲」とも言われる。釈奠では、当初、孔子の配享は、「四配」(顔子、曾子、子思子、孟子)とされていたが、時代が降るに従って、配享の数が増えていった。

- (5) 拙稿「朱子『家礼』と懷徳堂『喪祭私説』」(吾妻重二・朴元在編『朱子家礼と東アジアの文化交渉』、汲古書院、二〇一二年) 参照。

- (6) 大阪ホテルとは、大阪中之島にあった近代的ホテルである。明治三十六年(一九〇三)に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会にあわせて同年一月に竣工した。外国人も宿泊できる大阪初の洋式ホテルで、場所、現在の中之島公会堂の東側にあった。大正時代の終わりに焼失し、その跡地は現在、公会堂横の広場となっている。

- (7) その詳細については、拙著『世界は縮まれり——西村天囚『欧米遊覧記』を読む』(KADOKAWA、二〇一二年) 参照。

【附記1】

本稿は、令和四年(二〇二二)七月十六日、二松学舎

大学において開催されたシンポジウム「孔子を祭る―日本における孔子祭典―」（公益社団法人日本易学連合会主催、二松学舎大学日本漢学センター共催）での筆者の講演「懷德堂の孔子祭」を基に、改めて論考として書き下ろしたものである。なお、当日の講演録は、公益社団法人日本易学連合会『日本易道タイムス』増刊秋号（二〇二二年十月十五日）に掲載されている。

【附記2】

本稿で取り上げた懷德堂の「証憑書類」については、一般財団法人懷德堂記念会より特別に閲覧の許可を得た。また、資料の重要性和経年劣化に鑑み、電子化保存を提言したところお認めいただき、現存するものでは最も古い大正六年（一九一七）分の計一九六枚については、懷德堂記念会において全点PDFファイル化し、続く大正十一年～十五年分の計一八二五枚については、日本学術振興会科学研究費基盤研究B「日本近代人文学の再構築と漢学の伝統―西村天因関係新資料の調査研究を中心として―」（A21H00465a）の成果として全点PDFファイル化を完了した。この科研の代表者は島根大学の竹田健二教授、湯浅はその分担研究者を務めている。